

八幡太郎よしあし風雲録
血戦！横断歩道の巻
中川善史

風雲録
通



八幡太郎よしあしの居城において、よしあしと家老が話をしております。

「家老。お野菜高いのう」

「御意。いやになっちゃうでござりまする」

そこへ、ひょうと風を切る音がして、

「何事じゃ！」

一人とも身構えます。

「家老、そちの頭に矢がささっておるぞ」

「おや。あ、ほんとだ」

家老、自分の後頭部からふすつと矢をぬいて、

「これは矢文でございますな。文がついております」

「して、なんと書いてある」

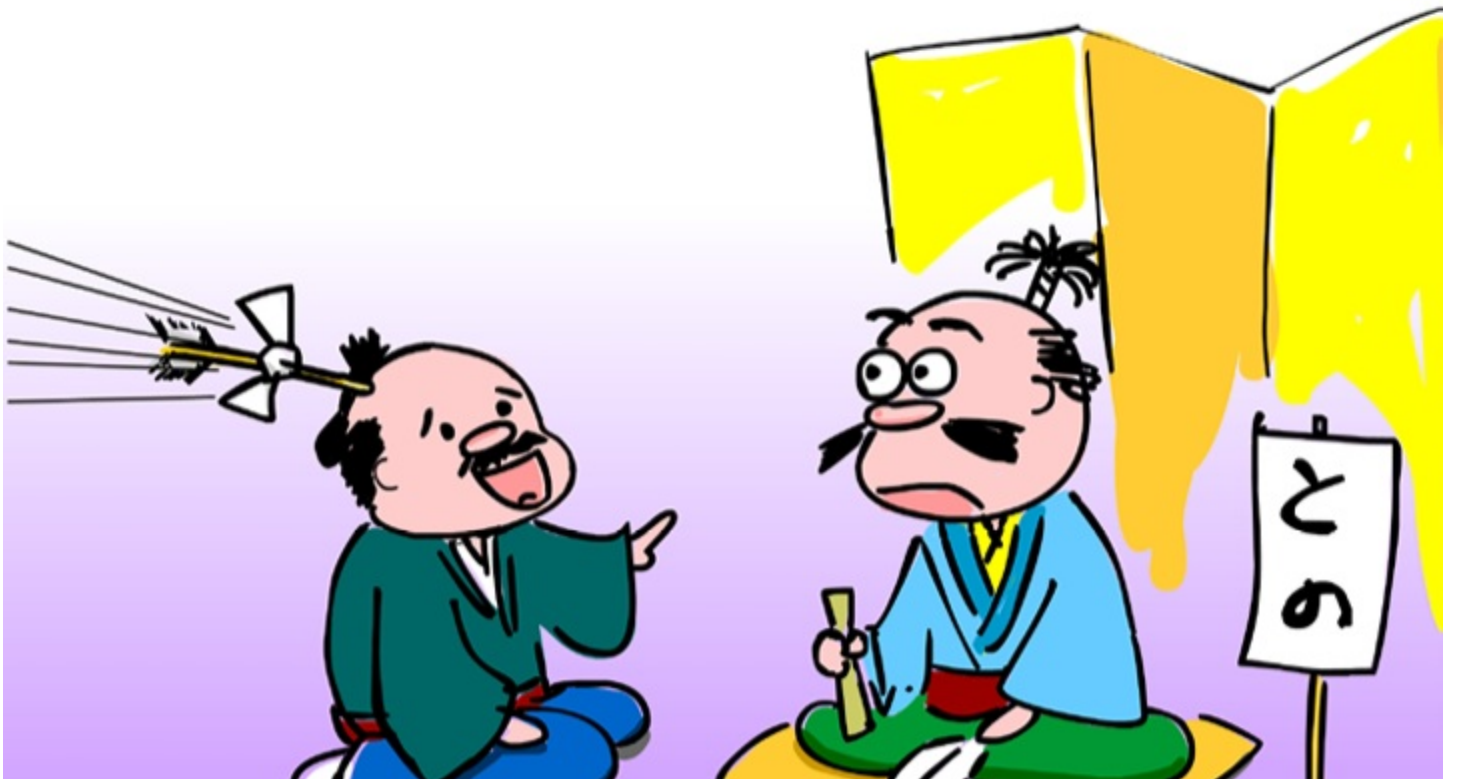
頭に矢が刺さっていた傷のことは二人とも気にしません。

「やや、これは、我らがライバル尻軽臀部守からの文」

「だから、なんと書いてある」

「いや、敵ながら達筆でござるな」

「なんと書いてあるのじゃ」



さすが、このあたりで屈指の大通り、六車線の広い車道に、ひっきりなしに車が行き交い、道の両側には大きなビルディングが並んでおります。

「むむ。この大通りなら、余が畢生のライバル、尻軽臀部守との決戦にふさわしい堂々たる構えだ」

そこへ、

「尻軽の軍勢が来たぞ」

と物見の兵から、知らせが入ります。

見れば、通りの反対側に、やはり五万の軍勢を率いた尻軽臀部守、馬上豊かに堂々とやってまいります。

こちら、よしあしも、はやる軍勢に向かって、

「よいか、ものども！ 命を惜しむな、名こそ惜

しめ！ 今こそ尻軽の軍勢、蹴散らしてくれぞ！」

よしあし軍より鬨の声、

「おー！」

さあ、今にも尻軽軍目指して突進しようとするぞ



の時、

「あいや、待たれい！」

「なんじゃ、家老！」

「殿、この激しい交通量をご覧下さいませ。」

「このまま突進すれば、味方の無駄死には必定」

「されば、なんとする」

「ただいま、それがしの手のものが、信号のボタンを押しております。緑に変わるのをしばしお待ち下さい」

「なに、ボタンとな。さすればここは……」

「はい、ボタン式信号にてございます」

家老直属の部下が、小笠原礼法をもってボタンを押します。

「殿、今こそ、緑に変わりましたぞ」

「よし、ものども聞け！ 尻軽臀部守を倒すのはこの戦をおいて他にない！」

「よいか、首級を取れば出世は望み次第。いざ、まいれ」

「おー！」

よしあしの軍勢、ふたたび行かんとするその時、



「殿、今ひとたび、今ひとたび、お待ち下され」

「家老、待ってなんとする！」

「殿が下知を下されているあいだに、また信号に変わってしまいました」

「むむ、なんとという事じゃ」

「それがし、察するに、このボタン式信号、車の交通量が激しいせいか、緑の時間が少ないかと思われまする」

「今日の決戦はわかっておったのじゃ。なんとかならなかつたのか」

「申し訳ありません。しかし、事情は尻軽臀部守としても同じはず」

その時、ひょう、と風を切る音がして、尻軽軍から放たれた矢文が家老の頭に刺さりました。

「家老、また頭に矢がささっておるぞ」

「む、これは、なんと」

家老、また矢を抜いて矢文を読み始めます。

「殿、尻軽軍より、合戦の場をあっちの横断歩道に変えようと言ってまいりましたぞ」



「ほう。して、その理由は？」

「行けばわかると書いております」

「むうう」

「罨ではないでしょうな」

「しかし、ここで臆したと見られるも小癩じゃ。よいわ。承知したと返事せい」

そこで、両軍、ぞろぞろと百メートルほど離れた別の信号のあるところへ移動します。

「おお。殿、読めましたぞ」

と家老が叫びます。

「ほう、なんと読んだ」

「ご覧下さりませ。我らの背後にあるのは、牛井の『よしな家』。一方、尻軽軍の後ろにございますのは、同じく牛井の『まず屋』。ともに、日本を二分する巨大牛丼チェーンの店舗でございます」といふことは？」

「これは、今日のこの合戦、勝った方が天下を制するものとの謎





うか、というその時、

「あいや、待たれい」

「なんじゃ、家老」

「ご覧下さりませ。我らの前を、大ムカデが横切っております」

見ると、長い長い、いつたいどれくらい長いかわからない大ムカデが歩いて、軍勢の突進を邪魔しております」

「しばし、大ムカデの通りすぎるのを待った方が」

「むむ。是非に及ばぬ・・・」

長い長いムカデはまだ続きます。まだまだ続きます。まだまだ続きます。そして、そこに止まってしまいました。

「いったい、いつになったら、いくさができるのじゃ」

「さすれば、ムカデに聞いてみましょう・・・おおい、ムカデ」

「あ、なんすかあ」

「そちは、なんでわれわれの合戦の邪魔をするのじゃ」

「あ、合戦してるんすかあ。おれ、今日、ピラまきのバイトしてるんすよ。でも、歩道で撒こうとしたら、おたくらが塞いでいるもんだから、しかたなく車道で撒こうと思って」

「車道でビラが撒けると思っておるのか」

「しゃーないっすよ。歩道、入れないんすから」

「ビラさえ、撒き終わればいいのじゃな」

「撒き終われば、今日は上がりっす」

「では、ビラを全部よこせ。我ら、四万八千の兵に配れば、それでよかろう」

「あ、そーしてもらえっと、助かるんすよね」

「では、配ってやるから、早く立ち去れ」

ようやくのことで、大ムカデはいなくなりました。

「皆のもの、よいか！ いよいよ決戦じゃ。次の緑で、突進するぞ！」

ところが、兵は皆、今配られたビラを読んでおります。

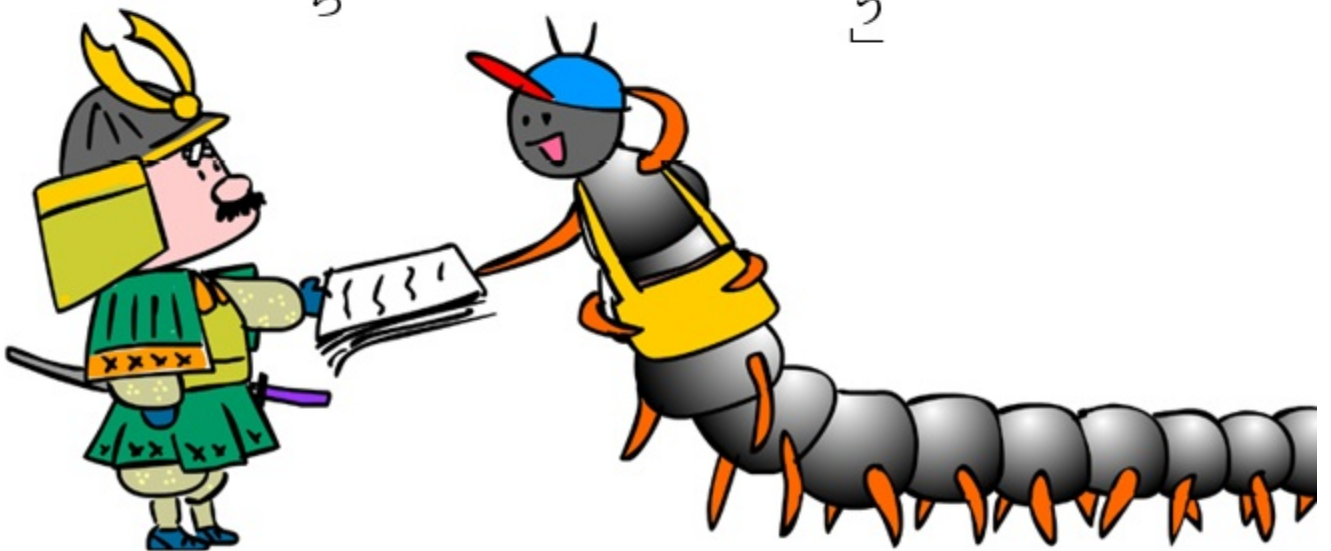
「あ、こんど、あっちに牛丼の『きれい屋』ができるんだ」

「割引券もついてるぞ」

「あー、あー、皆のもの、注目！ ビラを読むのは、合戦が終わってからにしないさい。そんなのは後にしないさい」

「だいたい、牛丼屋の前で牛丼屋のビラを撒こうという神経もわかりませぬな」

そこへ、また、ヒョウという風を切る音。道の向こう側から飛んで



きた矢が家老の頭に刺さります。

「殿、また矢文でございます。ええと、だいぶ時間も過ぎてしまったので、ここらで、食事およびトイレの休憩を取りたい、とのことでございます」

「仕方ないのう」

「では、皆のもの、食事時間とする。その辺の店で食ってこい。あ、領収書をもらってくるのを忘れずにな」

殿と家老、ある定食屋に入ります。

「今日の日替わり定食はなんじゃ。あ、メンチカツ定食。して、焼き魚定食は何になるな？ サンマか。じゃあ、焼き魚定食二人前」

「殿、ビールいっちゃいます？」

「そうするか。あ、こっちビール一本ね」

「いやいや、昼ビ―は効きますのお」

「まあ、しかし、尻軽も随分といくさのしにくい場所を指定してくるのう」

「やはり、近頃の戦国武将は都会生活になれきって、とかく軟弱になっておりますのう」
「わしらの若い頃は、野山を駆けめぐって健康的に合戦をしたものじゃ」



「家に閉じこもってゲームばかりしている侍が増えていると、今朝の瓦版にも載っておいりました」

「モバゲーで天下人を決めるようになったりするのではないか。嘆かわしい」

「我らの部下の体力低下が心配でございます」

「家老、どうじゃ。ここはひとつ、体力測定を実施してみるとい
うのは」

「おお、その展開だと、次回の『八幡太郎よしあし』は『体力測定
の巻』で決まりですな。フィールド・アスレチックかなんかで、
いろいろ笑いを取るのですな」

「しかし、我らが部下、キャラの立ったのがおらんからろう。話
が成立するかどうか心配じゃ」

「では、その前に『個人面談の巻』を入れてみてはいかがでしょう」

さて、昼ご飯も終わり、両軍、そろそろと例の横断歩道のあ
たりに戻ってまいります。

「はい、皆さん、お腹いっぱいになりましたかー」



「はい」

「居眠りしたりするんじゃないよー」

「はははは」

「では、気を引き締めて。だらだらしていると、怪我するからな。労災の対象になるぞ」

と家老が訓辞をしているところへ、「もしもし、もしもし」

お巡りさんがやってきました。

「あなたがたねえ、こんな大勢で歩道を占拠しちゃ困るんだよ」

「我らをなんと心得る。このあたりの領主、八幡太郎よしあし様の軍勢であるぞ」

「領主だったら、よけいに法規を守ってもらわなきゃ困るでしょ、法規を。道路使用許可

は取ったの？」

「い、いや、それは、場所を指定してきた尻軽軍で当然取っているはず……」

道路の向こう側を見ると、あちらでもお巡りさんに叱られて、ばらばらと散り始めて

います。

「ほら、あっちでも取ってないんだ。はい、解散しなさい、解散。

解散して帰りなさい」

「ちえ、なんだよー」

「尻軽のやつら、ぜんぜん、段取りなっていないじゃん」



群雄割拠、下克上の戦国時代。その古戦場は今も全国各地に残っております。しかし、この駅前大通り横断歩道は、惜しくも歴史にその名をとどめることは出来なかったのです。

血戦！ 横断歩道の巻（完）



八幡太郎よしあし 一血戦！ 横断歩道の巻一

<http://p.booklog.jp/book/58147>

著者：中川善史

絵：かないてつお

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/kanaitetsuo/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/58147>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/58147>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ